

花筐

観阿弥作

前

男 勅使

シテ 照日の前

後

王（謡なし） 継体天皇

ワキ 供奉官人

ツレワキ 随行者

シテ 前に同じ

ツレ 侍女

地は 前は越前 後は大和

季は 秋九月

男
詞

「是は越前の国味真野と申す所に御坐候。大跡部の皇子に仕へ申す者にて候。さても都より御使あつて。武烈天皇の御代を。あぢまのゝ皇子に御ゆづりあり。御迎の人々まかり下り御供申し。今朝とく御上洛にて候。さる間此程御寵愛あつて召しかはれて候。照日の前と申す御方。此程御暇にて御里に御座候ふが。彼御方へ俄の御上洛につき。御玉章と朝毎に御手に馴れし御花筐をまるらせら

シ
テ

「何事にて候ふぞ。某に持ちて参れとの御事にて候ふ程に。只今照日の御里へと急ぎ候。あらうれしや是へ御出で候ふよ。是にて申し候ふべし。いかに申し候。

男

「我君は都より御迎くだり。御位に即かせ給ひ。今朝とく御上りにて候。又是なる御文と御花筐とを。たしかにまるらせよとの御事にて候。これく御覧候へ。

シテ「さては我君御位に即かせ給ひ。都への御上り返す
ぐも御めでたうこそ候へとよさりながら。此年
月の御名残。いつの世にかは忘るべき。あら御名
残をしや。されども思召し忘れずして。御玉章を
残し置かせ給ふ事のありがたさよ。急ぎ見まら
せ候はん。

シテ「我応神天皇の孫苗を継ぎながら。帝位を履む身に
あらざれども。天照大神の神孫なれば。毎日に伊

勢を拝し奉りし。其神感の至りにや。君臣のえら
びに出だされて。いざなはれゆく雲の上。めぐり
あふべき月影を。秋の頼みに残すなり。頼めたゝ
袖ふれ馴れし月影の。しばし雲井に隔てありとも
と。

下歌地「書き置き給ふ水茎の。跡に残るぞ悲しき。

上歌「君と住む。程だにありし山里に。く。ひとり
残りて有明の。つれなき春も杉間ふく。松の嵐も

いつしかに。花の跡とてなつかしき。御花筐玉章
を。いだきて里に帰りけり。く。(中入)

ワキ、ツレ次第

「君の恵みも高照す。く。紅葉の行幸早めん。

ワキサシ

「かたじけなくも此君は。応神天皇五代の御末。大
跡辺の皇子と申しゝが。当年御即位をさまりて。

継体天皇と申すなり。

ツレワキ

「されば治まる御代の御影。日の本の名もあひにあ
ふ。

ワキ

「大和の国や玉穂の都に。

ツレワキ

「いま宮造り。

ワキ

「あらたなり。

ワキ、ツレ歌

「万代の。恵みも久し富草の。く。種も栄ゆく秋

の空。露も時雨も時めきて。四方に色添ふ初紅葉。
松も千年の緑にて。常磐の秋に廻りあふ。行幸の
車早めん。く。

後ジテ

「いかにあれなる旅人。都への道教へて給べ。

詞
「何物狂とや。物狂も思ふ心のあればこそ問へ。な
ど情なく教へ給はぬぞや。」

ツレ女
「よしなふ人は教へずとも。都への道しるべこそ候
へ。あれ御覧候へ雁金の渡り候。」

シテ
「何雁金の渡るとや。げに今思ひ出だしたり。秋に
はいつも雁金の。南へ渡る天つ空。」

ツレ
「空ごとあらじ君が住む。都とやらんも其方なれ
ば。」

シテ
「声をしるべの便の友と。」

ツレ
「我も田面の雁金こそ。つれて越路のしるべなれ。」

シテ
「其上名におふ蘇武が旅雁。」

二人一声
「玉章を。つけし南の都路に。」

地
「我をも共に連れて行け。」

シテ
「宿かりがねの旅衣。」

地
「飛びたつばかりの心かな。」

シテサシ
「君が住む越の白山知らねども。行きてや見まし足

引の。

二人「大和はいづく白雲の。高間の山のよそにのみ。見てや止みなん及びなき。雲井はいづく御影山。日の本なれや大和なる。玉穂の都に急ぐなり。

下歌地「こゝは近江の海なれや。みづからよしなくも。及ばぬ恋に浮舟の。

上歌「こがれゆく。旅を忍ぶの摺衣。く。涙も色か黒髪の。あかざりし別路の。跡に心の浮れ来て。

鹿の起臥堪へかねて。猶通ひゆく秋草の。野暮れ山暮れ露分けて。玉穂の宮に着きにけり。く。

ワキ「時しも頃は長月や。まだき時雨の色うすき。紅葉の行幸の道の辺に。非形をいましめ面々に。行幸の御先を清めけり。

シテツレ「さなきだに都に馴れぬ鄙人の。女と云ひ狂人と云ひ。さこそ心は檜の葉の。風も乱るゝ露霜の。行幸の先に進みけり。

ワキ「不思議やな其さま人にかはりたる。狂女と見えて
見苦しやとて。官人立ちより払ひけり。

詞「そのき候へ。

ツレ「あら悲しや君の御花筐を打ち落されて候ふは如何
に。

シテ「何と君の御花筐を打ち落されたとや。あら忌は
しの事や候。

ワキ「いかに狂女。持ちたる花籠を君の御花筐とて渴仰

するは。そも君とは誰が事を申すぞ。

シテ「事あたらしき問事かな。此君ならで日の本に。又
異君のましますべきか。

ツレ「我らは女の狂人なれば。知らじと思召さるゝか。
かたじけなくも此君は。応神天皇五代の御孫。過
ぎし頃まで北国の。あぢまのと申す山里に。

シテ「大跡辺の皇子と申しゝが。
ツレ「今は此国玉穂の都に。

シテ「継体の君と申すとかや。

ツレ「さればかほどにめでたき君の。

シテ「御花筐を恐れもなさで。

ツレ「打ち落とし給ふ人々こそ。

シテ「我よりも猶物狂よ。

地「恐しや。く。世は末世に及ぶといへど。日月は

地に落ちず。まだ散りもせぬ花筐を。荒けなや荒金の。土に落とし給はる。天の咎めも忽に。罰あた

り給ひて。わが如くなる狂氣して。共の物狂と。

言はれさせ給ふな。人に言はれさせ給ふな。

シテ「かやうに申せば。

地「かやうに申せば。只現なき花筐の。か毎々やおぼ

すらん。此君いまだ其頃は。皇子の御身なれど。

朝ごとの御勤めに。花を手向け礼拝し。南無や天

照皇太神宮。天長地久と。称へさせ給ひつゝ。御

手を合させ給し。御面影は身に添て。忘れ形見ま

でも。おなつかしや恋しや。

シテ
「陸奥の。浅香の沼の花がつみ。

地
「且見し人を恋草の。忍ぶもじずり誰故ぞ。乱心は君のため。こゝに来てだに隔てある。月の都は名のみして。袖にも移されず。又手にも取られず。唯徒に水の月を。望む猿の如くにて。叫び伏して泣き居たり。く。

ワキ詞
「如何に狂女。宣旨にて有るぞ御車近う参りて。い

かにも面白う狂うて舞ひ遊び候へ。叡覧あるべきとの御事にてあるぞ。急いで狂ひ候へ。

シテ
「うれしやさては及びなき。御影を拝みや申すべき。いざや狂はん諸共に。

シテツレ一声
「行幸に狂ふ囃子こそ。

地
「御先を払ふ袂なれ。

シテサシ
「かたじけなき御譬へなれども。いかなれば漢王は。

地
「李夫人の御別れを歎き給ひ。朝政神さびて。夜の

おとゞも徒に。唯思ひの涙御衣の袂をぬらす。

シテ

「また李夫人は紅色の。

地

「花のよそほひ衰へて。しをるゝ露の床の上。塵の

鏡の影を恥ぢて。終に帝に見え給はずして去り給ふ。

クセ

「帝ふかく歎かせ給ひつつ。其御かたちを。甘泉殿の壁にうつし。我も画図に立ち添ひて。明暮歎き給ひけり。されどもなか／＼。御思ひは増されど

も。物いひかはす事なきを。深く歎き給へば。り

せうと申す太子の。いとけなくましますが。父帝に奏し給ふやう。

シテ

「李夫人は本はこれ。

地

「上界の嬖妾。くわするこくの仙女なり。一旦人間に。生るゝとは申せども。終に本の仙宮に帰りぬ。

泰山府君に申さく。李夫人の面影を。しばらくこゝに招くべしとて。九華帳の内にして。反魂香を焼

き給ふ。夜ふけ人しづまり。風すさましく月秋なるに。それかと思ふ面影の。有るか無きかにかげろへば。猶いやましの思草。葉末に結ぶ白露の。手にも溜らでほどもなく。唯いたづらに消えぬれば。縹緲悠揚としては又。尋ぬべき方なし。

シテ「悲しさのあまりに。」

地「李夫人の住みなれし。甘泉殿を立ち去らず。空しき床を打ち払ひ。ふるき衾ふるき枕。ひとり袂を

かたしく。

ワキ詞

「宣旨にてあるぞ。其花筐を参らせあげ候へ。

シテ

「余りのことに胸ふさがり。心空なる花筐を。恥かしながらまるらする。」

ワキ

「帝は之を叡覧あつて。疑ひもなき田舎にて。御手に馴れし御花筐。同じく留め置き給ひし。御玉章の恨みを忘れ。狂気を止めよ本の如く。召し使はんとの宣旨なり。」

シテ「げにありがたや御めぐみ。直なる御代に帰るしるしも。思へば保ちし筐の徳。

ワキ「かれこれ共に時に逢ふ。

シテ「花の筐の名を留めて。

ワキ「恋しき人の手馴れし物を。

シテ「かたみと名づけそめし事。

ワキ「此時よりぞ。

シテ「はじまりける。

地「ありがたやかくばかり。情の末を白露の。めぐみに洩れぬ花筐の。御かごとましまさぬ。君の御ころぞありがたき。

地「御遊も既に時過ぎて。く。今は還幸なし奉らんと。供奉の人々御車やりつけ。もみぢ葉散り飛ぶ御先を払ひ。払ふや袂も山風に。さそはれゆくや玉穂の都。さそはれゆくや玉穂の都。さそはれゆくや玉穂の都に。尽きせぬ契りぞ有難き。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第一輯』大和田建樹 著